



キャッツ プリズナー ナイ

雌将校隷属調教

小説 夜士郎
挿絵 吉飛雄馬

立ち読み版

第一章	失墜の戦女神	006
第二章	噴水式肉便器	064
第三章	肉欲の宴	129
第四章	淫蕩舞踏会	179
終幕		251

登場人物紹介

Characters



ノエル・セリエンティ

ヴィスバ帝国軍師団長。階級は大尉。率先して前線に立つ有能な指揮官であり、兵士たちの人気が高い。気丈で凛々しく、知性を湛えた双眸を持つ。

アン

ノエルの部下。階級は少尉。上司と部下ではあるものの、ノエルとは本当の姉妹のような関係。優しく朗らかでノエルの世話を焼くのが大好き。

ヒルダ・ローシャッテ

ガラム帝国軍第四師団隊長。残虐さと苛烈さから"紅い悪魔"の異名を持つ。感情的になりやすい女性。

あまりに凄まじい肛肉刺激に——翻弄される雌豹が肉体。忌々しくも拘束された両腕は自由にならず、ゴルムのその毛むくじやらの両足に精液まみれの乳房を押しつけ、美貌を男根の間際に擦りつけて、それが愛するもののように抱きつくしかない。

「おやおや、そんなに情熱的に抱きつかれては、照れますなあ」

そんな声に、身体を離そうとしても、尻の中を挟られてしまうと、頭の中が爆発が起こつたみたいに白熱して、何も考えられなくなってしまう。ただ、身体を、心を、支えてくれるものを求めてしまう。

——ゴルムの汚らしい足にさえ、縋りついてしまう。

(こんな……このような無様を晒しているのに……私は……)

屈辱だった。今すぐ、自害してしまいたいくらいだった。それなのに。

(私は……私の身体はなぜこんなに、あつくなる……ああ……)

その汚辱に、戦場で味わうものと似た、焦げつくほどの高揚を覚えるのはなぜなのか。

柔らかな肉乳の先っぽの、敏感な肉豆が、ごわごわとした足の毛に擦りつけられて、すると甘い疼痛が胸全体に波のように広がっていく。尻肉を掻き混ぜ、肉孔をぐばぐばと割り広げる異物の衝撃に、その乳悦が混じりあい、脳髓をふわふわと蕩けさせていく。

(なんだ、この感覚は……、私の心が、開かれていく……)

産毛が、ぞくぞくと沸き立つ。腹腔の底、子宮がきゅうと泣いて啼いて、何度も何度も熱い肉汁を股間から溢れさせる——。

「くっ……もう、尻を弄るな、もうやめろっ、やめるんだっ！」

でないとおかしくなってしまう。せかいが狂ってしまう。

「あは、あははっ。やっぱりねえ、あなた……あなたって……」

ヒルダはくすりと微笑むと、全体重をぐうつと、悶々と揺れ踊る玉尻肉に乗せかけた。ずぬぶううんっ!!

「お、おひっ！ ささるっ、ひいぐっ、なかにささっていくううっ！」

腰がガクンと床に叩きつけられた。逼迫する尻肉の内側で、腸壁が引きずり下ろされ肛門が縦に引き伸ばされ膣道までぐちりと潰される。プラチナの髪を振り乱し、悲鳴を上げるノエルの声には、けれど鉛を転がすような甘い響きが混じっているのだ。

「こんなふうには、責められて弄られて乱暴にされて……犯されるのが好きなのね」

心底おかしそうに、隻眼の女は嗤う。

（何を、何を馬鹿なことをっ！ 私はそんな、変態じゃあ……）

「こんなに、髪を汚されて」

男の汚濁にまみれた銀髪を手取る。もう、年季の入った雑巾のようにぐちゃぐちゃでどろどろで、あの清流が如き美髪の見る影もない。

「お尻を踏みにじられているのに」

押しつけた踵を、今度は引き上げる。腸壁が引き上がり、骨盤までもくると丸まる。胎児のように身体を縮こまらせ、戦慄く桃唇から、長い嗚咽が垂れ流される。

「……ひくい、んはっ！ はっ、はうううううううう〜」

ゴルムの足に縋りついたまま、熟れ尻を震わせ、スタイルのよい肉体が肛虐に蹂躪されるその有様を嗜虐者の笑みで見つめるヒルダは、再度その右足を床に叩きつけた。

「つぐほううううっ！ お、しりっ、さけ、るゆううううっ！」

肉尻に広がる波紋、駆け抜ける衝撃に、おとが頤を晒し背中を反らす。耳朶まで充血し、全身に生温い粘汁が溢れ出す。横隔膜が激しく上下して、ふい鞭のような吐息を撒き散らす。

目の前が霞んで、揺れている。軍服はもう汗まみれで、内股までぬるぬるだ。桃色の唇から漏れ出る吐息は熱く、眉尻はとろりと垂れ落ちて、その麗貌を甘やかに彩るのだ。

「あなた、とおつても、気持ちよさそうよ？」

（そんな、わけがないっ！ 私は、誇りあるヴィスパの軍人だっ）

かぶりを振る。このような乱暴で感じるなどと、あつていいわけがない。

「わ……私を……私をこんなことで籠絡できるとでも思うなら、大間違いだっ」

ノエルの、気炎に猛るその言葉を、くすりと笑い捨て、

「いいわ。これからたつぷりと——あなたの身体に教えてあげるから」

絡みつく蛇のような、じつとりと生温い声音で、ヒルダはそう言うのだ。

「なあ、なあ、ひ、ヒルダ殿、い、いいか？」

肉虐に喘ぐノエルへと物欲しげな瞳を向けるゴルムの男根は、また、破裂しそうなほど膨れあがっていた。欲望を剥き出しな彼に対して、ヒルダは瞬間不愉快そうに顔をしかめ、

けれどまた薄い笑みをその頬に浮かべると、

「——じゃあ、口ね。お好きなように使いなさいな」

そう告げられるや否や、ゴルムはノエルの後ろ髪を掴むと、ぐいと天を向かせた。かばりと、口蓋が開く。熱い肉のたくる濡れ壺が、赤く瑞々しく輝いていた。

「もつとだ、もつと、辱めてやるっ 貴様にかかされた恥を返してやるっ！」

一度欲望をぶちまけて、けれど肉ペニスは飽きもせず毒々しく脈打っていた。どくどく、どくどくと、黒ずんだ亀頭が脈動し、カウパーが滲み出す。その先端を、女神の唇にあてがい、その顔面に騎乗するように股を開き、覆い被さり。

悔しげに引き結ぶ桜の唇を引き裂いて——ずぶううううっ！

「——っ！ がばおっおおおおっ！」

口から喉への一直線を貫かれた。背中がぐうんと波打ち、尻が落ちる。肛門に突き刺さったヒールは抜けずに、ヒルダの脚とともに、床と尻とにサンドイッチになる。

ぐずり！ と、なおさら直腸の深くに、ヒールの先端が突き刺さった。

（ん、んんっ！ 苦し、いいい……、あ、あ……）

満杯の口中から追い出された赤舌が、陰囊にべちゃりと貼りつく。凶悪な肉槍に口腔は貫かれ、その亀頭先端は食道の入り口にまで達していた。みちみちと、肉管が軋む。

息が、できないっ——！ 眼球がぐるりと上を向く、小鼻がぐうと膨らむ。

「あお……おお……っ！ ぐぶうう、ごほお……おん——うんっっ！」

ずぶじゅ、ずぶしゅつ！ ぐじゅ、ずぬぶううつ、ずぶうつ！

「は、ははっ、これはいいっ！ ノエル大尉、これはいい口マンコだっ！」

スクワットを繰り返すゴルフが、全身に汗を滴らせ、叫ぶ。

乱れゆく銀髪を引きちぎらんばかりに掴まれて、固定される頭蓋に叩き込まれる肉杭。

ぶるぶる激しく揺れる胸肉から精液の飛沫が上がり、誇り高きヴィスパの軍服に濁り染みを撒き散らす。その白濁は汗まみれの黒ストッキングにまで染みこんで、床に擦れてぐじゅぐじゅと、濡れた生音を響かせるのだ。

「んぐうっはおぐっ！ じゅるつちゅるりっ！ —— がんばおおっ！」

悲鳴も男根を突き立てられ遮られる。さながら百舌の速贅はやこえの如く、熱い鉄杭に上から下から貫かれ、哀れな獲物はただただ蹂躪されていくのみだ。

びくびくと白目を剥く瞳から涙を流し、鼻水を涎をだらだらと垂れ流している。

「ぐおっ、ははっ、ノエルの口マンコっ、口マンコおおっ！ くひっひひっひ……」

ずぶずぶずぶっ！ ずぼおおっ！

情欲のたぎりを思うさまぶちまけるゴルフ、その声からは理性が失われ、瞳はどろりと濁っている。鈴口から精液混じりの肉汁を溢れさせる、その男根はびくびくと、射精寸前の予兆に震えていた。陰囊が、ぎゅむつと縮こまっていく。

「あぶうううっ！ ー！ んじゅばっぐちゅ！ ごふっ、ふぐひっ！ んひいひいっ！」

（くっ、うあっ、壊れるっ！ 身体がっ、ああっ、壊れてしまうう！ うあああ……）

身体に力が入らない。口もおしりも、あつくてきつくていっばいで。

(アン、私、私はああつ、アン、アン、んっ、ふああつ、ああつ)

何かがこみあげてくる。たまらない不安感。ぶるぶると震える背筋。自分がどこかに吹き飛ばされてしまうような感覚が怖くて、しきりに想い人の名を呼んだ。

「ふふっ、お尻の奥の筋肉が、うねうねって、ヒールを締めつけてきたわ。イクのね？こんな乱暴にされて、イキそうなのねっ、ノエル・セリエンティ！」

「ふはっ、はあっ！ 違うっ、わたしはっ——げぼおっ！ ぐぼおつ、は、ちがっ！」

泣き叫ぶように喉を鳴らし、けれど子宮を灼き焦がす熱は増しゆく。

なぜだ、嫌なのに、嫌なのに、身体が勝手にその熱を拾い上げてしまう。

「く、くく、く……あはは、ははっ！ あはははははっ！ あなた、マゾなのよっ！ 最低の雌豚なのよっ！ それがあなたの本性なのよ、このメスブタっ！」

耳朶を打つ罵声が、ぞくりとうなじを震わせる。

(違うっ！ 私を……愚弄するなっ！ ヒルダ・ローシヤッテ！)

ぞわぞわとした怖気が、虫が這うように尻穴から広がっていく。こめかみに汗が浮き、乳首が硬くしこり立つ。敵に蹂躪されている、その思いが、子袋の裏側を撫でていく。

「くっ、ぐううっ、かあっ！ い、いくぞっ」

ゴルムが呻く。びくびくと身震いをする腰のペニス、一気に膨れあがる。そして。

「がはっ！ がははっ！ 出しますよ、出しますよっ、お腹の中にいっばい、いっばい



出してあげますよおおっ！ は、はあ——ああっ！

肉壁を灼き焦がす灼熱のマグマが、喉奥で噴出する！

「ぐおおおおおおおおおっ！」

どぐううん！ どぐん、どぐどぐどぐっ、どぶっしやあああああっ！

「——！ んぶじゅ、ぐぶぶっ……」

熱い、胸が熱い、熱いスープを飲み干したみたいに食道が焦げつく。胃壁にまで流れている、精液が。子種の肉汁が。おぞましい、おぞましいっ！

ノエルの肢体が痙攣する。うねくる腹筋、銀髪がはらはらと散華する。

（お腹につ、お腹の中に、あああまだ出てるううううっ！）

どぷりどぷりと腹腔を満たしていく子種汁の熱に全身が総毛立つ。

仰け反る背骨、ごきゅごきゅと喉が鳴る。流れ込む肉ミルクのその感触に意識が遠のいていく。黒艶の脚がひくんと震え、尻孔がぎゅっつとヒールを噛みしめる。

あまりに気持ち悪くて汚^{けが}らしいのに、けれどその汚辱は甘く痺れる電流となつて脳を撫で上げるのだ。背徳感に、こみあげる涙が頬を伝う。

「さあ、豚、思うさまイキなさいっ！ せいぜいお鳴きなさいな、ノエルっ！」

そしてヒルダが思い切り、腸肉の中で踵をぐじりと捻り回した。

「あいつっ！ あぎうっ！！ くくくくひっ、かつ、あおおお——っ！」

びくん、びくんっ！ 跳ねる美体、ぐるりと腸管を扶られ、爆発的な衝撃が一気に背筋

を駆け上っていく。意識が刹那、白け。同時に――。

「あご、おぼおああああつ、――つ、く、ひいひい――~~~~~つ！」

尻は床から浮き上がり、股間には粘ついた愛液が幾筋も糸を引いて。

唇を戦慄かせ下腹をうねくらせ一際激しくノエルの肉体がよがり震えた。

そして、がくと――脱力し、床へと崩れ落ちる。叩きつけられた肉の音は、びちゃりと水気混じりであった。身体を離す、ヒルダ。ヒールは抜けず、突き刺さったまま。

「げほっ、お、おああ……」

なんだ、この感覚は。自分が自分でなくなったような、地に足の着かないあやふやな心持ち。何か、覗いてはならない深淵を覗いたような、焦燥感。

「ぐうう……が、げほげほっ！ お、お腹が、くういっばいだ……」

何度も、咳き込む。今、この胃の中には、ゴルムの黄ばんだ子種汁がぶかぶかと漂っていて、それは遠からず体内に吸収されてしまうというのだから。

あまりにも、無様。こんなことでアンに顔向けができるのか。

（私……は、ヴィスパ皇国大尉、ノエル・セリエンティなのだぞ……。こんな、こんなことで折れてはならない、そんなことは許されなかつ！）

髪も、制服も何もかも、全身は汚辱にまみれていた。精液に濡れた肉体は被虐の汗に濡れ、お尻には、ハイヒールがぬぷりと突き刺さったままで。けれど――。

「は……はあ……、は、こんなことで、ちっぽけなプライドを満たせたのか？ ふ……」

情欲に濁っていく兵士達の目が、ねっとりまとわりつく。

(くっ……、愚物どもがっ……)

捕虜に対する扱わいも弁まえず、それに恥辱を与えて喜ぶなんて、軍人としての道理を外れている。所詮はギアガの蛮族どもだ、このような連中に視姦されたところで、恥ずかしさなど感じることはない。猿の群れに、見られているようなものだ。

(そうだ、たとえ乱暴を受けようと、私は折れることはないっ)

がしゃんと、檻を揺らし、目前に男の顔が迫る。そのぎらついた瞳めがノエルを睨にらめる。

毗めを吊り上げ、睨み返すノエル——男が、にいと笑った。

「今度のこれは、長く愉しませてもらえそうだなあ」

「だといいけどね。前のはすぐに壊れちまったからね」

——壊れるまで。ぞくりと、背中を冷たい指が撫なで上げた。

「くっくっく、さてさて、休憩時間も限られているし、便器を使うか」

と、男が、便器に立つようにノエルの前に立つ。股間のジッパーを下ろし、下着の切れ目を開いて、そこから男根を放り出す。途端に、

(うううっ、またこの臭いかっ……!)

鼻先に突き刺さる、生臭い男の臭い。腐った魚介類のような汚臭は、むわりと、生温い体温に茹ゆで上げられて、ゴルムのそれよりもなお強烈に鼻孔を抉くり抜く。

「訓練でたっつぶり汗かいたばっかだからな。匂うか、ええ？」

と、蒼い瞳の前で、ぶらぶらと揺らされる、赤黒くそそり立つ肉塊。充血し、膨れあがった亀頭、反り返った傘の部分が張り出して、まるで毒キノコのようなようだ。

「さてさて。今度の、この便器の使いごちはどうかな……?」

と。男はいやらしく笑いながら、腐棒を拡張された艶色の桃唇に近づけていく。

金属の輪の向こうに見えるのは、真っ赤な口腔と、身体中で、今はただそこだけが自由に動かせる、濡れた肉舌。ひくひくと波打つ口腔粘膜、ぶら下がる口蓋垂、全ては赤く煮立った鍋の中身のようだ。そこに、ずぶずぶと。

「んっ……んぐうううううっ~~~~!!」

「うおお……、暖ったけえ……」

肉キノコが潜り込んでいく。たまらない腐臭が口内に満ちて、鼻がつんとなる。

「ウウウンッ——!! うぐうんっ! くっ……!! おぶうっうっ!」

熱くて、固い肉塊が舌にぬぷりと触れて、奇妙な味が味蕾を駆け抜けた。塩辛く、苦く、エグみのあるそれは、ざらりとした感触を伝えてくる。恥垢だ。男の、溜まりきったチンカスが、清楚な舌を穢したのだ。

「んぐうっ! はぶりゅっ! あぶうううっ!」

こみあげる吐き気に震えても、巨大な芋虫は止まらない。

「はふっ、はふう——!! う、ぐう、っ、はっ、はっ……」

汚らわしい茂みを鼻息でそよがせ、ノエルは小鼻を膨らませる。必死で空気を求めれば、

鼻孔から脳幹まで通り抜ける精臭に、ぞわりと産毛が逆立った。

「おうおう、いい具合の便器だこりゃ、くひひひっ」

「うし、んじやおれも愉しませてもらおうかなあ」

と、その時だ。また別の兵士が男の横に立ち、股ぐらから、匂い立つ男根をずりりと引きずり出したのだ。「おいおい」と、顔をしかめる男に笑いかけ、兵士はそのいきり立つ肉槍を、一本のソーセージが埋まったままの開口器に押し込んでいく――。

「あおぼっつ?! んぐっ! おぐうううっ?! ぐぐぐぐぐっ!」

二本の肉男根が口中を埋め尽くす。熱い、ひたすら熱い圧迫感に、目が白黒となる。どくどくと脈動する血管が頬袋に押しつけられて、ぼこんと膨れあがる。

「おいおい、お前のチンポの感触があるぞ。きめえ」「ひゃひゃ。まあまあ」

男二人の男根が、濡れ舌と絡みあう。ぬちゆるぐちゆると口中に、響き渡る淫靡な水音。暖かな肉沼の感触を思う存分に味わいながら、男達はゆるゆると腰を揺り動かす。

金属輪を支点に、右へ左へとタクトを振れば、ノエルの頬の両方が、ぼこんぼこんと膨らんだ。それに合わせて柔乳もふるんふるんと左右に揺れる。

口中に溢れていく、夥しい二人分のカウパー腺液。塩辛くて生臭いそれを奥歯の裏まで塗りつけられて、おぞましさにひゅくと肺腑をしゃくりあげた。

「んぐっ……じゆるぶっ! くっ、くふううっ! ちゆるぶっ!」

(な、なんという匂いだっ……っ! 汚れてるっ、私の口の中が、穢されて……!)

何よりも、開口器のせいで抵抗もまならないことが、屈辱的であった。

手も足も、身体中を囚われて、一寸の身動きすら取れない。ただの、性欲を処理するための「穴」みたいに、二人は好き勝手に腰を押しつけてくるのだ。

「ごぼっ、ごぼおっ！　ぐじゅばっ、ぐじゅるっ！」

「んふうっ……おぼうっ！　はぶううっ——んむうぐうっ……っ！！」

二つの肉の相互運動は、休む間もなくノエルの濡れ壺を掻き回す。金属輪から叩き込まれるそれは、まるで肉の弾丸であった。

「おおっ、喉チンコが先っぽに当たってるぜえっ……きんもちいいっ！」

こみあげるえずきに細い肩が震えた。かっと思開かれる腫に涙が滲む、眉の狭間にきゅつと皺が寄って、そんなノエルの反応に嗜虐心を刺激されたのか、男は一息に、奥の奥まで強引に男根をねじり込んできたのだ。ぐじゅるりっ！

「——っ！　ぐうっ！　げぶうっ——！」

びくん！　とのたうっノエルの肉房が、豊かな質量を見せつけるように震え上がった。

頬は童女のように紅潮し、くっとお臍を突き出すように腰が浮かび上がる。筋肉が硬直し、肛門までもひきつれる。ぐじゅるう……ずりいっ！

「おうぼおっ！　……ちゆるうううっ、んぐぶうっつ！」

「次は俺っ！　そおらっ！」ずごんっ！

「……が……は……あ……っ……！　ごっ、ごほおっ——！」

競り合うようにもう一人が、ノドチンコに叩きつけてくる。食道まで届けとばかりに、口壁を抉る汚臭男根。全身を焦がすような熱感が、尻の先まで炙っていく。

「んぐううううう——っ、じゆるぱっ、じゆちゆりっ！ はぶっ！ じゆぼおっ！」

顎先に二つの玉袋がぺちぺちと貼りつく。熱塊が口中をぐちゃぐちゃと攪拌していく。(苦しい……くる、しい……いっばいいい……っ！ ふたっ……でっ掻き回されてるっ)

ぴっちり肉を包んだ黒いストッキングに、被虐の汗染みがじゆわりと浮かんでいく。軍服から伸びる細首が、紅に染まっていく。苦悶に、うねうねと細腰をくねらせれば、黒艶布のピンと張る丸尻までもぐにやりと歪む。

「ひやぐうっ……ぶばっ！ あおぐうぶっ……ごぶごぶっ！ んむううう……っ！」

二つのパチに口腔を打たれるたびにノエルの背中がびくびくと反り返り、全身に熱い戦慄が響いていく。口中をぐちゃぐちゃと掻き混ぜる、雄の精気が菌茎の隙間にまで絡みつき、苦しげに開閉を繰り返す鼻の穴からだと、透明汁が垂れて落ちる。

(におい、においでっ……へんになるっ！ か、からだがあつい……)

頭蓋が、狭隘な牢の中で前後に衝突して、意識が朦朧となっていく。貧乏揺すりをするように膝が震え、足指が苦耐にぐるんと丸まる。

脳の中に満ちてゆく、におい。ゴルムの体液のにおい。蘇ってくる。あの汚辱とともに身体に叩きつけられた、快楽の残滓が、ぬうと鎌首をもたげてくる。

オスの肉臭に導かれる、甘い記憶。下腹の奥がきゅんと疼いた。

「ちがうっ、こんな、おいでなんてっ、私はっ！」

「おっ、おっ、おっ、こりゃ、もうっ……」「くはっ、おっ、俺もっ」

手前勝手な前後運動を繰り返していた男達が、口惜しげに呻いた。

「おいおい、もうかよ、早えなあ」「よっ、早撃ちっ！」

それを囁したてる仲間達——そちらを睨みつけると、ラストスパートとばかりに、激しい腰使いでノエルの頭蓋を蹂躪していく。ぐじゅぼぐじゅぼと出入りする双肉、舌を採み潰す挟撃に、顎肉が引き伸ばされる。

「はっ……はおっ！　じゅるっ！　うぶうっ——んじゅるうううっ……っ！」

抵抗すらできぬノエルの喉奥を、穿ち抉る剛直棒。肉、肉、肉、口の中一杯の、チンカスマみれの肉塊に、腹の底まで響く激震を叩きつけられる。びくびくと震える鈴口の、先端穴がかばりと開いて、そこからたまらなく濃い我慢汁がびゅるりと溢れ出す。

きゅうとせり上がる陰囊、ぶくうと膨れる肉鞘の根本。

（ううっ、まつ、またあれかつ！　あのくさい液がでるのかっ、い、いやだっ、ああっ）

「おっ、出るっ、でるぞおっ！」「う、うグウウっ！」

嫌悪に青ざめるノエルの震える口中に、けれど男どもは容赦なく、欲望の煮汁を流し込んでゆく。どびゅるっ、どびゅどびゅ、どぐんっ！　どぶるるううううううっ！

「ぶぐううううっ!?　んぶう……っ!!　おぶうっおびゅうううううっ！」

口腔に吹き荒れる白濁の奔流。艶めく赤肉にまぶされる子種汁、舌の上にこってりと盛

られる雄の味が脳髓を痺れさせ、瞳をひん剥かせる。どろどろと溜まっていく二人分の肉汁は大量で、頬袋にまで温かな、えぐみのある粘塊が満ちてゆく。

(こんなに、こんなにいいっばいいっ……っ！ くさい、まずいい……)

「ふう、ふう、ふう……、こりゃいい。いい便器だぜえ……」

ずるり……と、男根が引き抜かれる。金属輪を潜り抜けた男根がくんと跳ね上がり、ノエルの美貌に子種汁の飛沫を撒き散らす。頬に、鼻の頭に、汚濁の化粧を施されていく。

(うああ、けがらわしいっ！ おのれっ、おのれおのれおのれっ！)

鼻をつく潮臭さ、皮膚に感じる男の体温そのもの。ヌメヌメと照り光る肉汁の、存在全てが不快であった。その不快なモノが、腹の中に満ちているということに、ぞつとする。

「げえっ、げぼごほっ！ ごぶうっ！ ひゅうっ——げはっ！」

苦しげな咳を繰り返すノエル。しかし、彼女が息つく暇も与えられず、また別の男が、赤茶けた極太の肉男根を押しつけてきた。

今度のそれは、金属の輪よりもなお太い、巨根であった。

(……はっ、そ、そんなの無理だっ！ く、口が壊れるっ！)

男の体軀もまた、その男根と同様に巨軀であった。脂ぎった顔は、少しばかり知恵が足りないのか呆けたように緩んでいて、何事か咬きながら、ぐいぐいと腰を押しつけてくる。力が、強い。めりめりと、顔に金属の輪が食い込んでくる。

(い、痛いっ、そんなに、強くするなっ、苦しいっ……)



頷くように押し込められた顎先が、喉に食い込んでくる。呼吸器官を閉じられて、腰をくねらせ苦悶を訴えるノエルに、けれどただ己の欲望をぶちまけることしか頭にないでくのぼうは、顎を割らんばかりの剛力でもって男根を押しつけてくるのだ。

「むうううううっ！　ぐうう——！　おんぐっ……くっ、ふっぐっ！」

「入らないいい……、なんで、なんでだよお……」

苛立たしげな声のまま、ぐうつと全体重をかけてきた。唇が押し潰される。頬肉が口蓋にめりこんでくる。顎が軋んで、目の裏がチカチカと瞬いていく。

そしてずるりと肉根の、その鈴口が口腔内部に頭を出せば、溜まった力を解放された肉拳がノエルの口中に思い切り叩き込まれる。喉奥までがめきめきと拡充し、喉の表面には亀頭の膨らみすら浮かんだのだ。かっぴらかれた眼球から、涙が溢れ出してきた。

「んぐうううううっ、はごおおおっ！　ひっ、ひぐううういいいっつ！！」

ぶるぶるぶると震える身体、拘束された肉体はただそれだけの反応しか示せない。

「おほおお……はいつたあっ……ぐひひひひ——」

涎を垂らしながら、男は肉根を動かし始める。

男が腰を引こうとすればガツチリと食い込んだ開口器に頭ごと引つ張られ、意識まで吹き飛びそうになる。押しつけられれば前歯をへし折るような圧力に顎の骨が悲鳴を上げて、跳ね上がる両足を拘束具に叩きつけながら燃えあがる苦悶を堪え忍ぶ。

（あづい……こんなに固いのがあつ、いっばいっ、口の中アっ……あふれてる）

「ひやはははははははっ！」「おいおい、青っ鼻がでてるぜえっ！」

どつと、兵達に巻き起こる、笑い。全身が、燃えるようだ。恥ずかしさと、怒りとで。
(人の口を、便器のように扱ってっ……！)

屈辱に頬肉が震える。ぎしぎしと、開口器の輪が軋む——眼下の男根を、噛み砕こうと。だが、男は何事もなく、萎えた男根を今度は楽に引き抜くと、ノエルの顔面で淫汁をぬぐい取る。赤らむ頬に、また塗りたくられる白化粧。

「くっ、くうううう……っ！」

あらん限りの力を込め、身体を揺さぶり、男を睨め付ける。乱れた軍服の胸元から重たげな二つの実が覗いていて、その玉肌にも熱い汗が浮かんでいる。口腔タンクから漏れ出す子種汁が、顎先を垂れ、胸の谷間へと零れ落ちていく。——と。

「うるせえし、もったいねえ。もっと味わいな」

兵の一人が、花瓶の載った棚から何かを取り出した。

黒く、丸い、それは蓋であった。

ぎゅつと——開口器の口の部分を、塞がれてしまう。さらに固定金具で留められた。

「ぐ、むぐう!? ふごおっ！」

呼吸が、できない。精液の溜まった鼻管が、呼吸圧で圧迫されて、ぶじゅつ！ と鼻の穴から二筋の白濁を噴き出してしまふ。途端に巻き起こる、嘲笑の渦。

体内に籠もる、雄の臭い。濃密で、痺れるような生臭さ。まるで、脳髄が子種汁の中に

(なっ……なんてっ、ことをっ……!! あ、ああ、あ……)

小便であった。

たまらない嫌悪が駆け抜けて、全身が戦慄く。重苦しい肉ボールが胸の上で揺れ、弾み、跳ね返りの飛沫が頬に飛び散る。肌伝わる、男の体温が、不快であった。

「おお、俺も俺も。よっ、と……」

それに調子づいた一人が、また別の角度からノエルに小便を浴びせかける。左腕から腋からと、左半身をしとどに濡らしていく体液。そして、また、一人。

ぷしゅああ、ぷしゅああああああつ! ぶしゅううううつ、じよぼおおつ

「ん——んっ! ウウンっ! うぐうう~~~~~んん!」

大事にしていた銀髪にまで、排泄液が降り注ぐ。プラチナの輝きが小便に濡れて、べつとりと、首筋やうなじに貼りつく。浸透する黄色汁は、襟元から背中にも流れ込む。

(汚いっ、汚いっ……!! やめろっ、やめろおお……)

涙を浮かべ、必死で首を振るけれど、また別の男が排泄を始めてしまう。喉元の、服の隙間に狙いをすまし、吐き出される汚液が胸の谷間に飛び込んでいく。腹筋からお臍へ向かい流れていって、ノエルの股間から、まるでお漏らしをしたかのように排出される。

濡れ皺の浮く軍服がびっちり、ノエルの肉体に貼りついて、そのむっちりとした雌肉の形を露わにしている。双球の膨らみから、細腰に流れゆくラインが艶めかしい。桃色の唇からびちゃ、びちゃと、小便の水滴がパンストに包まれた太股に滴り落ちている。



冷たいナイフで臓腑を刺されているようだ。見えぬ手で腸を握られているようだ。

「はあっ……、あ、ああっ！ ……あうあうっ、んんんっ……」

尻の中で何かが燃えている。切迫感に、玉葱を剥いたような玉尻が、ゆらり、ゆらりと左右に揺れて、その表面にもびっしりと、被虐の汗が吹きだしていく。

「ほら、起きなさい。お楽しみはまだこれからよ？」

ヒルダに肩を掴まれ、強引に座らされた。

「んんんんんんっ！ あっ、あーっ」

掲げていた尻を床にべたんと置いた瞬間、腹腔内部の液体が肛門へ向かい、一斉に流れ込んできた。骨盤底に潰け物石を叩きつけたような、重苦しい衝撃が全身を駆け巡る。

「はっ……はっ……っ！ くっ……くるしいっ、ひくはっ、お腹、破れてしまう……」

犬のような断続的な呼吸。膝の破れたパンストも汗まみれだ。

出したい、出したくない、出したい、出したくないと、思考はぐちゃぐちゃだ。

と、背中に柔らかな熱を感じた。ヒルダが、同じく床に腰を下ろして、背後から抱きついてきたのだ。何を、と問うよりも早く、その両の腕が、上着の裾から潜り込んでくる。

「な、何をつ……触るなっ、くうっ、触るなあっ」

筋肉に触れる女の両腕は濡れていた。あの、金ダライの中の液体であろうか。

「ふふ、あなたと、もっとスキンシップを図ろうと思ってね」

などと、嘯く。背中押し潰される肉玉の感触が不快だった。

動かせない身体に鞭を打ち、逃げようとする。けれど、両足にヒルダの足が絡み、下肢を固定され、肉体を掌握される。ノエルの身体に絡む、肉体の生々しさにぞっとする。まるで、蛇。

その、筋肉を這う蛇の手が、ブラジャーの障壁までを掻き分けて、ノエルの胸に触れてきた。ぬちゃりと濡れた感触が、乳神経に新鮮な刺激を与えてくる。十匹の蛇に絡まれて、両の乳房が揉まれ始める。ぬる、ぬりゆりと、捏ねられる、捏ねられる。

「んっ……あっ、はっ……た、戯れをつ……！」

脳裏に、さざ波が押し寄せてくる。それは、絶妙の力加減で刺激される、乳房から生まれた甘い波だ。柔らかな脂玉が、ヒルダの愛撫により自在に形を変え、その優しげですらある手付きが、むしろノエルの身体をあえかな陶酔へと誘うのだ。

「ふふ、つるつるしてるわ。赤ちゃんの肌みたい」

耳朶に触れる、濃厚な女の香り。紅い唇は濡れている。

両手で掬い上げるように持ち上げられ、左右に広げられ。押し潰されて、引き伸ばされる。子供の玩具のように弄られて、乳腺までが掻き乱される。身体中から力が抜けていくようだ。脳の中で飴を転がすような、甘い乳悦に、瞳が潤んでいく。

「ああんっ……はああんっ！ さ、さわるなというのに……つくふうんっ！」

腹腔の逼迫感^{ウツクシ}は身体中を焦がすのに、胸に与えられる乳悦はそれに掻き消されることもなく、ノエルの意識を淫惑の境地へと誘う。女であるが故のツボを知り尽くした乳責めに、

銀髪の戦女神は執拗な蛇から逃れようと身悶え、熱い息を吹きこぼす。

「ふふ……ほおら、胸が熱くなってきたわ。火傷やけどしそう」

ヒルダの指が動くたび、前方に伸ばされた黒艶の美脚がもどかしげにうねくり、指先が丸まったり伸ばされたりを繰り返す。絡まり合う四本の足は互いに体温を交換しあい、さながら交尾を行うナメクジの如く擦りつけあい、蠢きあう。

膨らんだノエルの浣腸腹が異様であった。ずん、ずんと、臍の奥から、巨人の足踏みのような激震が身体に脂汗を浮かばせて、蓋をされた肛門の筋肉がかあつと燃えあがる。

その苦痛が、排泄欲が、乳弄りの甘美感と混じり溶け合い、身体を熱くさせる。

「胸っ……むねえ……っ、もう……さわるなっ、何か、なにかがへんになる……」

ゆるゆると首を振り、背中から這い上がる熱い虫を追い払おうとする。

覚えがある。この感覚。あの日、ゴルムを相手にした時の、未知の感覚――。

「何を言っているのよ。もう、こんなに、固くしちゃって」

と、可笑おかしげに、ヒルダはその爪先を、肉球の先端で尖った肉苳に食い込ませた。

乳マッサージにも触れられなかった敏感突起に、不意に駆け抜けた痛悦。

ぴりぴりつと、胸全体に広がる電流が、ノエルの背中を反り返らせた。

「んひいひいっ!」

不意に意識を白くした反応に、怯えすら感じてしまう。

「戦女神といわれても、やっぱりただの女よね。弱いところは、みんな一緒」

指先で摺りあわせられる。擦過が甘い陶醉となって全身に波及する。

指先で押し潰される。鋭い痛みに腰が跳ね上がり、喉元が赤く染まる。

「あつ……あつーっ！ ひゃあんっ！ さつさわるなつ、さわるなあつ！」

何よりも羞恥を覚えるのは、喉から吐き出される、己のものとは思えない甘い声だ。

甲高く、艶を帯びた、まるで発情した猫のような。はしたない、声だ。

くりっ、くりりっ、……にゅ、むちゅ……、ぐっ、ぐりゅっ、くりっ

「はあつ、……は、ふ……ん……ふううう、う……」

声が、変わっていく。ねつとりとした、粘性の声に。

ひくん、ひくんと、震える、震える。太股が、腰が、肩が。眉尻がだらりと下がり、頬

から力が抜けて、赤く開いた口蓋から、精液の臭いを吐きこぼす。

（あ、あ……、ひっ、ンンっ……もうっ、もう、な、何かが……）

小さな絶頂が、腰を一際震わせて、脳髄へと駆け上がる。それが意識を飛ばそうとした瞬間。不意にヒルダが手を放した。

「あ……」

思わず漏れた呟きに、名残惜しげなものがなかっただろうか。

蛇が、離れていく。

「ふ、ふふふつ。なあに、物足りないかしら？」

立ち上がり、ヒルダはそんな言葉を投げつけてくる。かっつ、頭に血が昇った。

「馬鹿を言うなっ、わ、私はっ！」

「でも、大丈夫よ。もう、すぐに。効いてくるから」

(……効いてくる？ 何を——)

と、問い返すよりも早く。ノエルは自身の身体の異変に気がついた。

肉の疼きが、身体から引かない。淫らな乳責めは触手を放したというのに、腹腔を炙るような淫熱は、むしろその激しさを増していくのだ。肛門が、むずむずする。直腸に熱湯を注ぎ込んだような熱を感じ、お尻にじんわりと汗が浮かんでくる。

「なっ、なんだこれっ、おしりっ、お尻の中があっ……！」

——痒い。

ゆで卵を並べたような臀部を、ぐねぐねと床に押しつける。

——痒い。

黒いストッキングが、悩ましげに震える。脚指先が、すりすりと擦りあわされる。

——痒いっ……。

浣腸液で膨らんだ腹腔の、排泄門から臍までが、燃えるようだった。

「なっ、なにをっ……！ 何をしたんだ、私のからだにっ……」

呻く。一呼吸ごとに、痒みが増してゆく。

「その浣腸液はね、ある薬品と山芋を混ぜ合わせた、特製のもののよ。どう？」

尻孔の中で、虫が這っているようだ。腹の内部が痒いという、未知の状況に身体は混乱

し、全身にどつと脂汗が吹きだした。そして。

ヒルダの両腕で愛撫を受けた、胸の双玉。そこにも、火がつく。

「うああっ……な、あつ——かゆ、い……っ！」

じんじんと、痒みと疼きが襲いかかってくる。乳房が、倍にも膨れあがったような錯覚を覚え、敏感な乳肉豆は限界まで勃起して、厚い軍服を押しあげていた。痒みに身体を揺さぶれば、服の内側に敏感豆が擦られ、その刺激に乳神経までむず痒く疼く。

「胸え……っ！ むね、がつ、おしりがあ……っはあつ——ああ……っ！」

手が勝手に、胸に伸びる。思わず自分で揉みそうになって、慌てて自制する。

絶頂の間際に断絶された官能が、ノエルの体内で燻っている。肉乳果が、覚えてしまったのだ。ヒルダの淫らな指の技を。その爪先で与えられた駆け抜ける甘美を。

敵の手でもう一度、この痒みに満ちた乳房を弄くられたいと、そんな思いが——

(な、何を考えているっ、私はっ！)

そんな自分の思いを、顔を振って必死で否定する。けれど。

身体の前全てがじわじわと、甘い痒みに支配されていく。毛穴という毛穴を広げ、真っ赤になって喘ぐノエルの、意識すら霞ませるその痒みが、克己心を端から食い荒らしていくようだ。腋下を濡らし、双の太股を押しつけあい、戦女神は懊悩する。

脂の乗った美尻の中身は、いよいよひどいことになっていた。

億匹の虫が腸壁に喰らいつついているみたいだった。身体が勝手に、床に尻を擦りつけて

しまう。ぐりぐり、ぐりぐりと、少しでも痒みを拡散させようと、細腰をうねくらせ内股に筋肉の筋を浮かせて尻玉を押し潰してしまふ。

び、びびびと。ストッキングのあちこちが破れていく。黒艶に丸い肌色の穴がいくつも口を開いて、張り詰めた太股の肉が、瑞々しくも零れ出さんばかりであった。

「くううっ！ 下劣な真似をつ……！」

何よりも、その刺激が、排泄欲を極限まで高めてしまうのだ。

腹が、破れそう。臍から内臓が飛び出してしまふそう。奥歯を、噛みしめる。

こうなればむしろ、肛門に栓をされているのは幸いなかもしれない。だが。

「なあに、お腹のほう、もう出したいの？」

と。ヒルダが、思考を読み取ったかのように、そんなことを言ったのだ。

肩口を蹴りつけられた。背中から倒れ込み、仰向けに寝転ぶ。その腹に、ヒルダの脚が乗せられた。風船腹がぐにゅりとたわんで、重苦しいどよめきが雌の肢体を打ちのめす。

「んぐおうっ！ うあああああつ！ やっ、やめつ、やめろおっ！」

腹腔を押し潰す圧力に、ぶんぶんと首を振り、思わず、叫んでしまっていた。

内臓がうねる。脳裏をハンマーで殴られたような衝撃が襲いかかる。目が眩み、脂汗で濡れたストッキングを跳ね上げる。お尻がびくびくと痙攣した。

「あら、面白いわね、これ。くす、くすくす」

その美貌を愉悦に歪め、妊婦のように膨らんだ流腸腹を、なお足で責め立ててくる。ぐ

いぐいと、足裏で胃の腑の底を押し込めれば、腸管を満たす浣腸液が肛門へと殺到し——
堰き止められた肛門裏で、直腸をめきめきと膨らませていく。排泄への苦悶が、気の狂う
ような痒みと渾然一体となり、反抗の意志すらも灼き焦がしていく。

「はああんっ！ さけっ裂けるっ！ お腹っ、破れるううっ！ ふああっああ〜っ！」

浣腸液が、胃にまで逆流してきそうだ。喉を晒し、舌を突き出し、頬を涎まみれにして
床にばたばたと足を打ちつけ、腹腔苦悶にのたうちまわる戦女神。

「ふふ……辛そうね、可愛そうね？ いいわ、今、楽にしてあげるから」

優しい口調でヒルダは、ノエルを蹴り転がした。

床の上に俯せにされる。ひくひくと震える肉尻は、太股の付け根まで露わであり、その
肉谷の狭間にはピンク色のプラグが直立している。

そのプラグを、ヒルダの指が挿んだ。尖った爪先が、皴肉へと食い込む。

「——っ！ やっ、めっ、せめてっ、せめて便器でっ……」

大便器へと注がれる、ノエルの瞳は切望に満ちていた。もつとも憎むべき敵の目の前で、
床の上に垂れ流すなど——死に勝る、屈辱であった。

床に、爪を立てる。穢れた床の上を、腹這いに這う。まるで蛙のような有様。

圧力に膨れる水っ腹が床と擦れれば、冷たい悪寒が全身を駆け巡る。それでも一歩、一
歩と、ストッキングを裂きながら、便器に向かって歩を進め。

ぐっつと、背中に足を乗せられ、ぴんと弓なりに反り上がった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評発売中



カノジョ 少年に封じられたとき 魔神降臨の刻!
玲音と冬馬、交差する2人の物語、
衝撃の最終章へ!

全国書店で
好評発売中



お腹の子供のパバを探してます!!
ポテ腹魔法少女が父親探しにひたすらH!

ピルグリムメイデンⅢ 復讐の魔神
「小説…狩野景 / 挿絵…ぼち。」

魔法妊婦ハラマセ∞ハラズメント
「小説…上田ながの / 挿絵…瀬上大輔」

魔海少女
ルルイエ・ルル2
「小説∞羽沢向 / 挿絵∞ピエール☆よしお」



全国書店で
好評発売中

クトゥルフの娘たちが 学園祭でメイドさんに変身!?
ルルたちに新たな邪神が這い寄り!

既刊LINEUP

- 山嵐学園戦姫 / ノブナガ! ①~③
- BLANGEL 輪に乃て語る愚者の夜
- 不死の吸血鬼ガトラスのご主人様を募集しようです

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①~③
- 呪詛漁らい師【コースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画
- 借金お嬢 크리스 ①~③
- 無敵の短剣士ガトラスに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園 ブラックキャット



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリエ
http://www.comic- Valkyrie.com/

cranberry
http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
http://www.mille-feuille.jp/

モバイル二次元ドリーム
http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!